

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷五十五第

月七年七十和昭

## 論叢

南方農業に於ける労働力の問題…………… 經濟學博士 八木芳之助

佛印に於ける貯蓄及資本に就いて…………… 經濟學博士 松岡孝兒

ナチスの賃銀保護政策の原理…………… 經濟學士 中川與之助

資本形成の意義…………… 經濟學士 中谷實

實物的波及過程の彈性分析…………… 經濟學士 青山秀夫

## 研究

協力工業の技術的向上と再編成…………… 經濟學士 田杉競

成果學說の理論的根據…………… 經濟學士 尾上忠生

## 說苑

大島貞益の譯書及岡田好樹…………… 經濟學博士 本庄榮治郎

「經濟之理」について…………… 經濟學士 上杉正一郎

シエーパースの國土計畫論…………… 經濟學士 上杉正一郎

## 附錄

彙報

## 資本形成の意義

中 谷 實

## 一 序 言

資本形成の問題は貨幣動態理論の中心課題をなすものである。即ち、貨幣現象の靜態的觀察に止まる貨幣數量説が貨幣數量増減の結果を専ら物價水準の騰落に於てのみ見るに對して、貨幣の動態的觀察は資本の形成を通じて生産の構造從つて經濟の構造の變革發展を説明せんとするが故である。而して此の資本形成の問題は先づ近代の信用創造理論と共に生起し、信用創造が資本を形成せしめるのか又は過去の節約が資本形成の原因であるかと云ふ形に於て提出せられた事は謂ふ迄もない<sup>1)</sup>。即ち一方に於ては、マクラウド一派の信用資本理論の如く、貨幣又は信用を以て直ちに資本と解して信用の創造が同時に資本の形成を意味する事を主張する者や、ハーンの如くに、信用の創造が需要發現への影響を通じて分配關係を人的及び時間的に變化せしめ以て生産の増加延いては資本財の増加を結果す可き事を主張するものがある<sup>2)</sup>。又他方に於ては、資本をば専ら資本財の意味に解して信用の創造が物財を形成し得るものでなき所以を強調する者や、マンシュテットの如くに、假令信用の創造が實物資本の増加を齎らし得るとしても、資本の形成に決定的な役割を營むものは節約でなければならぬと主張する者がある<sup>3)</sup>。而して資本の形成を廻ぐる此の論争が、何日迄も激しく闘はれて究極の妥結を見なかつた所以のものは、一面に

1) 拙著；新金融理論、第一篇第三章第一節。

2) H. D. Macleod, The Theory and Practice of Banking, 6th ed. Vol. 1, 1902 p. 2.

3) A. Hahn; Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits, 3<sup>1</sup> Aufl. S. 124—

於ては、理論の前提として完全雇傭を執るか又は不完全雇傭を執るかの相違にも起因してゐたであらうが、根本に於ては、資本概念従つて資本形成の意味に關する兩者の見解の相違が禍根をなしてゐた事を否み得ないのである。

顧つて現時の戦時經濟について見るに、何れの交戰國に於ても軍需生産の擴充及び國民生活の安定等の爲めに、經濟の總ゆる面に於て強力なる國家的統制が加へられ、特に資金の面に於ては生産力の擴充の爲めに其の供給が直接間接に促進せられてゐるに拘はらず、所得消費の面に於ては貨幣購買力の發現が制限せられ抑止せられてゐるのが常である。我國に於ても亦、支那事變の勃發直後久しからずして、一方に於ては臨時資金調整法や銀行等資金運用令によつて生産力擴充の方面への資金の流れが條件的に又は積極的に促進せられ來つたと共に、他方に於ては、價格の公定消費の規制及び浮動購買力の吸收等によつて所謂購買力の消費的發現が極力抑制せられ來つた事は周知の所である。而して斯かる統制經濟に於ける貨幣は、其の購買力發現の一般性に關して多大の制約を蒙るが故に、其の本質的性が抽象的なる消費手段としてよりも寧ろ抽象的資本として特徴づけられねばならぬのであるが、此の場合、消費的支出を抑制せられて或は貯蓄を強要せられ又は生産力擴充の方面に振向けられた貨幣が如何なる意味で資本を形成する事となるか。此の點に關する解明として未だ必ずしも満足す可きものが興へられてゐないのである。

斯くて資本形成の概念は、自由主義經濟の發展にとつて缺く可からざるものなるのみならず、統制經濟に於ても亦資本制生産の方法が捨て去られざる限りは重要であり、而も日常不用意の中に屢々用ひられ乍ら其の意義が未だ明確に究明せられたとは云ひ得ない。故に茲では資本と資本財との關係を顧慮しつつ資本形成の意義を考察

- 4) V. F. Wagner; Geschichte der Kredittheorien. 1937, S. 182.
- 5) H. Mannstaedt; Ein kritischer Beitrag zur Theorie des Bankkredits 1923, S. 23-25.

する事としたのである。

## 二 資本概念と生産力

資本形成の意義を知る爲めには先づ資本の概念そのものが明らかにせられねばならぬ。資本の概念は今日多種多様に解せられ其の起源も亦舊いのであるが、最初は専ら私経済的に解せられて利子所得の流れ出づる源泉が資本なりと考へられたのである。従つてそれは、私有財産制を基礎とする財産権的な概念であつて、未だ経済的な概念に迄成熟してゐなかつた事は謂ふ迄もない。此の財産権的な資本概念は後に生産技術的に補足せられて營利資本と云ふ経済的概念に發展したと考へられるのであるが、他面に於て古典學派は生産のみが所得を齎らし得ると言ふ根本思想より、資本をば生産手段と解し、生産されたる生産手段即ち資本財を以て資本と考ふるに至つたのである。即ちジェヴオンズが「勞働の進行中に勞働者を養ふ可き財」を資本と解し、ベーム・バヴェルクが此れによつて迂回生産の理論を確立し、更にウキクセルが「年々に貯へられる勞働力及び地力」を以て資本と考へたのも全く此の流れを汲むものに他ならない。

翻つて、資本を以て利子所得の源泉と見る常識的な解釋は早くより實際界に行はれ、貨幣と資本との間に密接なる關係の存する事は疑のなき事實であるが、それが經濟學的に基礎づけられるのも亦資本の生産力によつてである。即ち先づ利子の側から考察するに、利子に就ては、(一)貨幣資本に對して何故利子が支拂はれるか。(二)債務者は何によつて利子を支拂ひ得るか及び(三)利子の高さは何によつて決まるかが考へられねばならない。謂ふ迄もなく、私有財産制に基く法律秩序の下に於ては、一方に於て契約締結の自由が與へられてゐると共に他方

- 6) 拙稿：貨幣の資本的考察(經濟論叢、第五十卷第三號)。
- 7) W. Heller; Die volkswirtschaftliche Leistung des Kapitals (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Band, 153, Heft, 314.) S. 382.
- 8) Akusius v. Navratil; Die Kapitalkraft (Jahrbücher für Nationalökonomie und

に於ては債務履行の義務が負はされてゐるが故に、借入資本に對して債務者が利子を支拂はねばならぬ事は當然の事ではあるが、經濟的には、資本の生産力が貸與へられた事に對して利子が支拂はれるものと考へられねばならない。又何によつて利子が支拂はれ得るかと云ふ點に就いて見るに、借入資本が生産的に用ひられた場合には其の解答が極めて簡單である。即ち債務者たる企業家は借入資金を以て諸種の生産手段を購入し、此れによつて生産を開始し擴張し得る事となるのであつて、生産の結果新らしき財が生産せられ又生産物が増加するが爲めである。ナヴラテイルは、斯くの如き企業家をして生産を開始し擴張せしめ得る力をば資本力と稱し、資本を以て一の獨立の生産要素と解するのであるが、其の當否は暫らく措き、此の資本力によつて新しく生産せられた財又は増加せられた財の中で、資本の協力に依る部分から利子が支拂はれ得ると言ふのである。即ち利子は無から支拂はれ得るものではなく資本の生産力から支拂はれるのである。然らば借入資本が生産的結果を擧げ得ざる場合には如何に説明せられるか。此の點に就てもナヴラテイルの言を借れば次の如くに説かれるのである。即ち先づ、今日の法律秩序に従へば、生産的結果を擧げ得なかつたのは債權者の責任ではなく債務者の責任であるから、債務者は如何にしても利子を支拂はねばならぬし、又此れを經濟的に見れば、今の場合の資金が生産的結果を擧げ得なかつたとしても、債務者は此れを更に生産信用として他へ轉貸し得たるが故に利子を支拂ひ得た筈であると考へられる。而して債務者たる企業家が完全に破産したる場合はさて措き、假令企業は失敗しても尙債務者に屬する他の財産より借入資金及び利子が支拂はれる時には、斯かる利子は過去に於ける生産の結果より支拂はれたものと考へられねばならぬであらう。又消費信用の利子に關しては、債務者が他日生産力を得て生産的結果を擧げ得る迄、債務者の生命を維持すると云ふ消費信用の生産性に歸せしめられねばならぬのであつて、何

Statistik Band, 153, Heft, 314.), S. 400.

- 9) 例へばAdam Smithも資本を説明して、機械、生産設備及び土地の改良をば固定資本となし、商人の資金、商品、原料、補材助料等を流動資本としてゐる。
- 10) W. St. Jevons; Theory of Political Economy, 2ed. p. 223.

れにせよ、利子は資本の生産力より支拂はれ得る事となるのである。最後に利子の高さが何によつて決まるかと  
言ふ點について見るに、現實の市場利子は資本の生産力のみによつてではなく市場に於ける種々の勢力關係によ  
つて決まるとしても、資本の生産力に當る自然利子又は均衡利子より甚しく懸隔せる市場利子の下に於ては、經濟  
が安定的に永續し得ざる事を考へれば、利子が資本の限界生産力によつて決る所以を認めねばならぬであらう。  
尙貨幣を以て資本と見る根據が、貨幣經濟の下に於ては諸種の生産手段を新らしく結合して生産を可能ならしめ  
るものが貨幣であると云ふ點に求められる事は謂ふ迄もなく、此の場合にも資本の生産力が概念構成の重要な  
役割を營んでゐる事が瞭らかである。

以上は資本概念を財に於て求めんとする説と此れを貨幣に於て求めんとする説とについて資本と生産力との關  
係を考察したものであるが、次には、資本概念が一つの目的概念である事を主張する立場に進まねばならぬ。而して  
此れに屬するものの中でも、シェツフレの如きは尙資本財そのものに執着して、「財の資本的性質は最初から興  
へられてゐるものではなく、それが一定の生産的目的を興へられて初めて資本となる<sup>15)</sup>」と言ふのであるが、より  
抽象的な資産又は貨幣價值量を資本とし、此れを目的概念として説明するものはツウキーディネツク・ズエーデン  
ホルストである。彼によれば、或るものが資本となるか否かは其のものの處分權を有する者がそのものに對して  
興へる決定如何に依るものであつて、所得(特に貨幣所得)の獲得に向けられた資産高が本質的な資本概念を<sup>16)</sup>提供す  
るものであり、それは一定の循環に於て其の形態を變化するが故に統一的には貨幣單位で示される價值量として  
把握せられねばならぬ。勿論、生産されたる生産手段を以て資本とする立場に於ても、資本概念が生産の爲めと  
云ふ目的によつて規定せられてゐる事は云ふ迄もないが、生産された生産手段を以て資本とする時には、其の中

11) K. Wicksell; Vorlesungen über Nationalökonomie, I Bd. S. 214.

12) A. Navratil; a. a. O. S. 402.

13) a. a. O. S. 403.

14) a. a. O. S. 405—407.

に資本と云ひ得ざるものが含まれると共に資本家的生産方法に用ひられざる生産手段をも含む事となるが故に、彼は目的概念たる事を強調すると共に貨幣價值量を以て資本としたのである。

又資本を目的概念とする考へ方を推し進めて行けば、財又は貨幣價值量の處分従つてそれを如何に使用するかと云ふ事が重要な要素となるものであつて、此の觀點より資本をば處分力又は處分権を獲得する權力手段と見るロードベルタスの如き考へ方が出て來ることも想像に難くはない。加之、これを經濟の組織又は構成と云ふ點に關聯せしめて考察するならば、財貨義務の處分権又は處分能力が分業を構成し生産に秩序を與へるものであるから、資本は又國民經濟の組織手段でありその構成の爲めの權力手段であるとも見る事が出来る。即ちヘツラーが、資本を以て本來的な組織手段であるとし、それは強制や刑罰によつてではなく、企業家をして自ら營利原則に従つて活動せしめる事によつて經濟を構成せしめると言へるのも、全く右の如き事情によるのである。

尙右の他に、特殊なる資本概念を立てるものとしては、合衆國に於て發展したる擬制資本の概念がある。例へばフイツシャーは資本を以て擬制的なる收益の源泉となし、又既にクラークは「眞の資本は其の額を減減する事なくして絶えず所得を生む可きものであり、反之資本財は消耗す可きものであるが、人が資本を生産的に投下した場合に資本は資本財に轉化する」と述べてゐる。<sup>15)</sup>然し乍ら資本の表現形態が資本財であると云ふ考へ方は、資本が勞働力として表はれる場合を考ふれば直ちにその行詰る事が知られるであらう。

要するに資本概念は右に述べたるが如くに多種多様にあり、或は資本財に又は貨幣に、更には抽象的なる貨幣價值量とか處分能力又は組織手段等に於て把握せられてゐるのであるが、何れに於ても資本概念にとつてはその生産力が最も重要な役割を營み居るものであつて、同時に資本と資本財とが決して同一の範疇に屬せしめらる可きものでない事が知られるのである。

15) A. Schäffle, Die Nationalökonomie, 1861, S. 42.

16) v. Zwiédinck-Südenhorst; „Kapital und Kapitalismus“ (Schmollers Jahrbuch, 54. Jahrgang, II Halbband), S. 107f. 尙高田保馬; 第二經濟學概論、三五頁—三六頁。

## 三 資本財の生産増加と消費の制限

前述の如く資本と資本財とは本来別個の概念であつて此等を混同す可きものではないけれども、資本の形成と謂はるる場合に資本財の生産増加を意味するものが多く、ハーンの如きも信用の擴張が分配關係の變化を通じて生産の増加を齎らし従つて資本財の生産増加を來す所以を主張するのである。殊に今日、資本財の生産増加を目的とする生産力の擴充が消費の制限によつて實現す可く努力せられてゐるが故に、眞の意味の資本形成を考察するに先立つて資本財の生産増加と消費制限との關係を瞭らかにしたのである。

先づ資本財の生産増加が問題となる時には生産増加一般が問題となる可く、従つて生産の意義そのものから考察を始めねばならない。即ち生産とは、勞働土地用役及び資本財等を結合的に消耗して新らしき財を作出する事であり、生産そのものとしては生産物の數量及び種類は問題ではなく經濟的價值量のみが重要である。然るに資本財の生産増加が問題となる時には、生産物の中で生産力を持つ生産手段と全然生産力を持たざる純粹享樂の意味に於ける慾望充足手段とを分ちて考へねばならない。蓋し前者のみが資本財を形成するものであり、繰返し再生産過程に於てその生産力を發揮するに反し、後者は消費によつて永久に再生産過程より消去し了るが故である。又生産は諸生産財の消耗と同時に起り此れによつて諸生産財の生産力が生産物に轉形して行くのであるが、此の生産財における生産力の消耗と云ふ概念は消費の概念と明確に區別せられねばならず、消費の概念を明確にする事によつて又消費の制限による資本財増加の意味が瞭らかとなるのである。而して此等の概念規定に關してはコツカリスの<sup>23)</sup>説が興味深き故に、以下彼の解釋に従つて説明する事とする。

17) Heller, a. a. O. S. 394 参照。

18) a. a. O. S. 395.

19) I. Fischer; The Nature of Capital and Income, 1906, p. 52.

20) Clark; Distribution of Wealth (cit. in Heller; a. a. O.).



コツカリスによれば生産力の消滅 *Eliminierung* は此れを三つに分つ事が出来る。其の一は生産力の消費 *Konsumtion* であつて、これは生産力が純粹なる享樂にのみ轉化する場合即ち享樂財の生産に於て起る。従つて所謂生産的消費は消費の概念に入らざる事は云ふ迄もなく、又消費財の中にも生産力が内在し、消費財の消費によつて外部的生産力は消滅するが内部的生産力が再生産せられるが故に（假へば生命の維持による勞働力の再生産）此れ又消費の概念に入れられない。又其の一は生産力の破壊 *Vernichtung* であつて、これは何らの慾望充足を伴はざる單なる生産力の消去を意味し、例へば天災・地變及び病氣等によつて生産力が破壊せられる場合を指す。而して第三に生産力消滅の最後のものは生産力の消耗 *Verzehrung* であつて、最も自然的な規則的な生産力の消滅である。即ち一般的には斯かる生産力の消耗によつて生産が行はれ新らしき生産物が作出せられるのであるが、此の生産力の消耗は常に必ずしも生産を實現せしめるものではなく、従つて消耗されただけの價値量が新しく作出せられざる事があり得る。例へば或る人の勞働力が、消耗せられたる勞働エネルギーの再生産に必要なだけのものを作出し得ずしてその勞働者を死亡せしめたる時には、勞働力の消耗は生産的結果を擧げ得なかつたのであつて、勞働力が消費せられたのではない。而して生産力の消滅に於ける此等三種の區別について見るに、生産力の破壊及び生産力の消耗は自然に支配せらるる所多く人間の意志によつては避け得難き所である。然るに生産力の消費のみは、生産力をば特定の方向即ち純粹なる奢侈享樂の充足に向けるものであるから、人間の意志によつて此れを制限し又は絶無ならしめる事さへ可能である。加之、消費は純粹享樂の爲めに生産力を轉形する事であるから、謂はゞ贅澤に屬し何人にも許さる可き性質のものではなく、更に生産力に餘剰の存する場合にのみ此れが許さる可く然らざる場合には多大の禍害を及ぼすものである。

21) 高田保馬；前掲書——二頁。

22) 同上。

23) A. Kokkalis; „Kapitalbildung und Kapitalgütervermehrung“ (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. 148, Heft 2, S. 131—135.

斯くて、生産力の消費・破壊及び消耗の三者の合計が新らしき生産物に等しき時には經濟は靜態にあり、單純なる生産力の再生産即ち純粹なる生産力の循環が存するのみであつて資本財の生産増加を期待し得ない事は云ふ迄もない。加之、此の場合、此等三つの生産力の消滅が不變としても、現存資本財の減少を防ぐ爲めには生産力の消耗が常に生産的結果を挙げねばならぬ事が明らかであらう。然らば生産力を量的に増大せしめ従つて資本財の増加を來す爲めには如何なる方法が採らる可きか。斯かる靜態の前提より出發してコツカリスは、勞働時間の延長と消費の制限との二つを擧げるのであるが、假令生産力の量的増大によつて勞働人口が増加し資本財の數量が増加しても、それが直ちに資本の形成にはならない旨を指摘してゐるのである。<sup>24)</sup>

何れにせよ、消費の制限によつて資本を形成すると謂はるる場合に、其の資本が資本財を意味し、現存資本財の單なる數量的増加を以て資本形成と見らるるならば、明らかに消費の制限換言すれば節約によつて其の効果が期待せらる可く、而も消費の制限禁止とは享樂財の生産禁止そのものである所以が知られ得るのである。

#### 四 資本の形成と貯蓄

資本の形成が資本財の形成にあらずとすれば資本形成の意義は何處に求めらる可きであるか。資本を以て貨幣と解し貨幣の創造を以て資本形成とするならば問題は至極簡單であるが、貨幣そのものを以て直ちに資本となし得ざる事は前述の所より明らかである。即ち一定の貨幣價值量は資本となり得るけれ共、此れが資本たり得る爲めにはその處分權を有する者が此れを一定の目的例へば所得の獲得又は生産力の發現に振向ける事が必要である。<sup>25)</sup>

24) a. a. O. S. 137.

25) a. a. O. S. 139.

26) Zwiedineck-Südenhorst; a. a. O.

今翻つて資本發生の歴史を顧みるに、資本が人類の産物であり、人類の經濟が資本による生産力の異常なる増大によつて今日の發展を見るに至つた事は一般に認められる所である。而して此の事が認められるならば、資本發生の事情は人類に於ける生産力の異常なる發展が何に基くかを顧みる事によつても窺ひ知られ得るであらう。斯くて人類に於ける生産力が特に異常なる發展を示すに至つた理由を見るに、それは先づ人間に於ける貯蓄をする性質と次には自然力を克服利用する性質とに求め得られる。資本の形成が生産力を貯へ此れを資本財に投下する事に他ならぬとする貯蓄説は前者を重視せしものであり、資本の形成が生産力の増大が過去に於ける貯蓄に基くよりも寧ろ積極的なる人類の自然克服に基くと見る立場は後者の特質に意義を認めるものである。然らば此等兩つの人類の性質の中で、生産力の増大資本の形成の爲めには何れが重要であるか。此の點に關してコツカリスは原始人類に於ける經濟の營みから兩者を比較して次の如く述べてゐるのである。即ち原始人が自然を克服し此れを利用する事を知つたより以前は、已に明日の生活の爲めに生存手段の一部を貯へる事を行つてゐた。而も斯かる生存手段は、それが熟したる果實の如くに自然の恵みであつて長期の保存に堪えず、又保存の方法をも知られざるのみか、假令此れを保存しても他の種族や野獸の爲めに奪はれる危険さへも存してゐたから、此れが貯蓄は非常に制限せられ言ふに足らざるものであつた。<sup>27)</sup> 然るに原始人の頭が稍々發達して、自然力を利用する事によつて、手から口への生活の代りにより有利な方法が用ひられ得る事を知り、更に其の具體的な方法を發見するに至れば、茲に初めて道具が生産せられ生産力が急激に高められる事となる。<sup>28)</sup> 即ち、單に生存手段の一部が貯蓄せられた時代には未だ資本が發生したと見られ得ないのであるが、道具が用ひられ自然力が克服利用せられるに至れば已に一種の資本が成立したと見る事が出来るのである。

27) Kokkalis, a. a. O. S. 148.

28) a. a. O. S. 144.

斯くて資本が自然力の克服利用に於て成立し生産力増大への積極的なる努力によつて實現せられたとするならば、斯かる生産力の増大を可能ならしめる特質は何であるか。此處でも又コツカリスの説を援用するならば、それは人間の思考力又は處分能力と實行力とに分たれる。前者は人間の精神力に屬し後者はその肉體力に屬する事は謂ふ迄もない。<sup>29)</sup>今此等の兩者について見るに、思考力又は處分能力は何を生産し又如何に生産す可きかを決定し、肉體力は右の決定を實現せしめるものであつて、此等の兩者が結ばれて初めて生産が行はれ經濟活動が行はれるのであるが、而も尙兩者の間には、人類の經濟發達への貢獻に於て相異なる所あるを免れないのである。即ち生産に關して前者が決定し命令する所をば後者は唯忠實に實行するに過ぎざるが故に、前者の方に第一義的の重要性が認めらる可く、更に思考力處分能力たる精神力は何物によつても代へ得ざるものであるが、實行力たる肉體力は、經濟の發達に伴ひ資本が形成せられるに至れば次第に自然力又は資本財によつて代はられ得るが故である。而して斯かる説明が許されるならば、資本の形成は精神力と肉體力との中その何れに負ふ可きかと云ふ事も亦明白であつて、それは先づ思考力處分能力たる精神力に負ふ所が大なりと言はれねばならぬ。換言すれば、精神力が何を又如何に生産す可きかを思考處分し、此れを肉體力に指示する所に資本は形成せられるものであつて、資本形成は新しき生産方向を與へると云ふ事に他ならぬ。而して又資本形成の意義を斯く解してこそ、ツヴィーディネツク・ズニーデンホルストやヘツラーの資本概念に見らるる如き、資本を以て處分力又は組織力と見る見解と一致し得るのである。

以上によつて資本形成の意義は一應瞭らかにせられたのであるが、更に資本形成に於ける貯蓄又は節約の意義を瞭らかにする爲めには資本形成による生産力の増大について考察せねばならぬ。前述の如く、資本形成は生産

に新らしき方向を與へる事であるが、それは同時に生産諸力をより効果の大なる方向に導く事であり、謂ふ迄もなく生産力の増大を目指して行はれるものである。而して斯かる過程は通常生産の合理化の名を以て呼ばれてゐるのであるが。此の合理化の概念には、前述の如き生産力の消費破壊及び消耗が出来得る限り避けられる可き要請が含まれてゐる。故に若し、貯蓄乃至節約の概念が、此處に所謂生産力の消費を制限する事を意味するならば、貯蓄も亦資本形成に對して多大の意義を持つものと思われねばならぬであらう。然らば此の點は如何に説明せしめる可きであるか。今コツカリスの設けた例によつて考察すれば次の如くである。即ち先づ或る家庭に於て、毎日八時間の労働が家族の生命を維持する爲めに必要にして充分なりとする。而も労働時間を此れ以上に延長すれば生産力の消耗の方が其の結果より大となるとすれば、此の家庭に於ては貯蓄は行はれない。然し乍ら生産上に合理化が進みて、従來と同量の生存資料を獲得する爲めに日々五時間の労働で充分となれば、三時間の労働は此れを資本の獲得に向け得られる事となり、資本は専ら合理化によつてのみ形成せられる。勿論此の場合に、八時間の労働によつて必要以上の生存手段を生産し、此の餘剰の生存手段を貯へた後に資本形成に移る事も考へられるであらうが、其の時には生存手段の蓄積と資本の生成とが共に合理化に負ふものと云はねばならぬ。何れにせよ資本の成立後は、此れに基く生産力の増大によつて生存手段の蓄積は一層増大するに相異なく、唯合理化の結果をば資本形成に向けて純粹享樂の爲めに用ひないならば、消費の制限は全く不必要なりと言はねばならぬ。勿論此れに對しては異論が存せざる譯ではなく、例へば貯蓄理論の立場より、此の際三時間の餘剰労働を純粹享樂財の生産の爲めにも振向け得られるが故に、此れをなさざる事は即ち消費の制限であるとも言はれるであらう。然し乍ら最後の場合の如きは、資本形成の意味の合理化を行つたのではなく、他の種の合理化即ち現在の享樂を

増大するための換言せば消費の爲めの合理化を行つたものと言はねばならぬのである。

要するに資本の形成に於ては、消費の制限又は節約乃至貯蓄は第二義的の意義を持つに過ぎぬと言はる可く、唯資本形成の目的たる生産力の増大が消費によつて其の効果を減殺せられるのみである。即ち例へば、甲が石を投げて乙を殺した場合に、石が乙を殺したのではなく乙を殺したのは甲であると云ふに等しいのである。

## 五 結

### 言

資本形成なる言葉は理論上に於ても實際上に於ても屢々用ひられて居ながら其の意義が必ずしも明確ではない。或る時には資本財の生産増加を以て資本の形成と考へ、又他の場合には貨幣の創造を以て資本形成と呼ばれてゐる。而して資本を形成せしめるものは過去の節約であるか又は信用の創造であるかと云ふ論争に於ても、兩者に於て抱かれてゐる資本形成の意義が異なる爲めに無用の争を繰返した怨なしとしないのである。而も資本の概念自體が多様多様であつて統一を缺く爲めに、資本形成の概念が益々混乱せざるを得なかつたのである。

斯くて私は、諸種の資本概念を系統的に追及して資本概念の發展を考察すると共に、資本の概念と資本財の概念とを峻別して資本形成の意義を考察せんと試みたのである。惟ふに資本の概念は、最初は貨幣所得の源泉と云ふ常識的な概念として成立したのであらうが、古典學派が生産された生産手段と云ふ物財による資本概念を樹立してより、財を以て資本と見る立場と貨幣を以て資本と考へる説とが對立するに至つたのである。然るに一方に於ては生産された生産手段が必ずしも資本として用ひられるとは限らず、他方に於ては貨幣も亦貨幣其のものとしては資本と考へ得ない。生産された生産手段をば資本たらしめ、又貨幣をば資本たらしめるものは、此等に資

本用途を興へる事であつて、此の點より資本は或は處分力と見られ又は構成力と考へられるに至つたのである。従つて資本財の生産増加と言ふ事は眞の意味の資本形成ではないが、假りに此の點を許すとすれば、資本財の生産増加を齎らすものとしては信用の擴張のみならず節約も又重要な意義を持ち得るのである。彼のハーンが信用創造を以て資本形成に對して第一義的の意義を認め乍ら而も尙過去に於ける生存資料の蓄積を必要とした事、及びマンシュテットが資本形成の根本條件を節約に求め乍ら尙勞働力の調達の爲めに信用擴張の必要を述ぶる點等は、全く右の事情を物語るものであらう。

而して最後に、資本財では無く眞の意味の資本が何によつて又如何に形成せられるかを究める爲めに、資本形成の目的とする生産増加（従つて又經濟の發展及び生産構造の變革）が如何にして達せられて來たかと云ふ歴史的结果から迫り、又原始社會に於て初めて資本の成立する事情から推測して資本形成の意義を尋ねる事とした。其の結果は、資本を形成するものは人間の精神力即ち思考力判斷力等であつて、所謂資本の循環過程に於て種々の形を執つて現はれるが如き諸々の生産要素を、最も效果的と判斷する方法に於て結合する事を決定する事が、資本形成の意義と云はれねばならぬのである。従つて其處では貯蓄又は節約と云ふ事も消極的な意義しか持たず、貨幣の創造と云ふ事も、それが企業家に貸與へられると云ふ條件を附せられる事によつて、資本形成の重要な一手段となるに過ぎないのである。而して資本主義經濟の下に於て、専ら企業家の營利的判斷によつて行はれた資本形成が、一定の目的によつて國家的に統制せらるる今日の經濟に於ては、國家意志決定者の其の目的に従ふ判斷によつて行はるる事となるのである。